殿址に於いて發見し得た炕の遺制の如く渤海獨自のものがあつて頗る興味を惹くのであるが、この渤海味豐かな第五宮殿址にて開元通寶ならぬ和同開珎が發見された事にも我々は彼我の修交に顧み少からず感興を覺える事である。

以上は調査報告の傳ふる所、特に興味をひいた二三の主だつた事項をあげたにとゞまるが、我々の期待にそむかず本調査はなほ渤海文化究明に資すべき數々の基礎的事實を明かにして居る事であつて報告書の傳ふる所、なほ語るべき多くのものを存するが、今は割愛に從ひ、以下に本書の目次をかゝげてその内容を推していたゞく事とする。

序說、調査の經過、遺跡（一、外城遺址　二、内城遺址　三、宮殿址　四、寺址　五、自餘の遺址）遺物（一、瓦磚　二、石獅頭　三、建築金具　四、兵器　五、陶容器　六、佛像　七、和同開珎　八、雜具）結論。

本文九〇頁、圖版百二〇、卷末には三葉の地圖（内渤海國上京龍泉府址全圖、宮城址圖は關東軍陸地測量部片野彌一郎、黑田一兩氏の作製になる）英文解說及び本調査以前に踏査したボノソフ氏の報告を添へて居る。

（昭和十四年三月、東亞考古學會發行、四六四倍判、定價參拾圓）　〔岡田芳三郎〕

E. O. Lorimer ;

Language Hunting in the Karakoram.
London, 1939. pp. 310.

印度の西北地方は、カラコオラム連山、ヒンヅクウシュ連山、葱嶺連山などの會合地點で世界でも有名なる高山地帶であるが、東洋歷史はこの地帶に、或は北より南へ、或は西より東へ、或はその反對に、幾多の足跡を印してゐる。今でも交通困難なるは變らないが此の地點は英露接壤の重要邊境であるから、複雜怪奇なる歐洲政局の遷轉はインダス上流地方に何時古代東洋史に於けるが如き爭奪を廻起しないとも限らない。希臘王の東征、蒙古土耳古可汗の南下は現代に於ても必ず此地方へ先づ惹起されてくるに違ひない。時局上にも注意してゐても興味はある。

然し僕の興味は古代史に懸つてゐる。歷山大王東征

の終點地方であり、法顯玄奘の遊歷行程であり、貴霜族蒙古族の侵入占領の範圍内である事などが、こゝに關心させるのである。かのスタイン卿も數度の中亞に跨がる大旅行の外に西北州の探檢を屢々試みてゐる。その各々の研究報告でなくても、讀物として書いてゐる On Alexander's Track to the Indus. Personal Narrative of Explorations on the North-West Frontier of India. London, 1929. を讀んでも、歷山大王は固り、法顯玄奘兩三藏の史蹟が出てくる。又 G. Morgenticrne 教授の Report on a Linguistic Mission to Afghanistan. Oslo, 1926. 及び Report on a Linguistic Mission to North-Western India. Oslo, 1932. などを見ると、西域記の迦畢試國だの、商彌國だのが研究されてゐたり、パシュトオ語と于闐サカ語との關係を論じてはサカ族は貴霜族より早くセイスタン地方迄這入り込んでゐたなどゝ云つてゐる。だから此邊はインド・イラン史の範圍内のものである樣であるが、關係する所は廣く東洋古代史に關係する。だから僕には興味が懸つてくる。況んやこのインドとアフガニスタンの接する地方には尙ほトルコ語蒙古語西藏語の飛地が存在すると云ふから尙更の事である。

本書は此地方の言語風俗を研究し、殊に Burushaski 語に於て大著を完成した D. L. R. Lorimer 中佐の夫人が、夫君に隨つてギルギットやアリアバドに滯在した折りの見事なる寫眞が豐富な旅行見聞記である。ロリマア氏は元印度軍隊の軍人で印度治政にも關係した人である。ギルギット地方を治めてゐた際に、治政の必要上からでもあるが、同地方に行はれてゐる諸方言を習得して種々資料を蒐集してゐた。中でもブルシャスキ語は學界で所屬や起源が分らず、頗る問題になるものであるから、特に之に意を注いだので、退役して歸國に際しては、夥然たる稿本を抱いてゐたのであつた。英國本土へ歸つて之を悠然と整理してゐた所が、瑞典學界は之を認めて出版させてくれと申込み、斯界の權威モルゲンスチエルネ教授が校字の役に服すと云ふのであつた。かくて出版の方法が立つとロリマア中佐は尙ほ此研究を完成せしめんと、再び夫人を同伴して印度に向ひ、歐人の未だ餘りに行かないアリアバドに滯留二年、困苦に堪へ、重病にかゝるの不幸を克服して研究を續けて來たのであつた。この研究より得た

る結果は大著の補遺に現はれると云ふ。夫人は夫君の内助の役ばかりでなく、仕事に對しても勤勉なる助手であつた。言語研究には必須の儀禮風俗の調査については、婦人たるの特權を以てよく土人の家庭に出入して調査をした。本書は夫人がそれらの見聞を記したのである。篇を分つこと三、章を別つこと二十八。第一篇はギルギット時代の概略から再び東行するの緣起を記してある。第二篇は東方への旅行記。第三篇はハンザ地方での生活記錄である。こゝで詳細にハンザの生活風俗習慣儀禮などの見聞を記錄してゐるので、名助手たるを彷彿せしめるのである。餘事ではあるが、既に彼等歸國の日も近づく頃に、北京を立つて中亞を旅行しつゝあつたピイタア・フレミングの蹤跡が不明となつて、タイムス新聞の請ひにより之を搜索せんと氣をもむ内に、フレミングがスキイとホツケイの國際選手エラ・マイヤアル孃と共に異樣の風態で颯爽とハンザへ乘込んでくる話があつて、頗る面白い。

本書はこんな著書であるので、別に直接東洋史界に關係ある記事があるのではない。只一夫人が東洋語學者の夫君を助けて生活する記錄として少からざる興味があり、且つは中佐が研究調査した印度西北部地方は極東史家にも關心されるべき土地だから、其地方の見聞記もさう打棄てゝ置くべきものでもないだらうかと思つて、瀏覽の餘、この書の出刊を報ずる次第である。〔石濱純太郎〕

（七十頁の北京通信より續く）檔案類は標本部の方で見ましたが、さう大した數ではありません。或は不注意かとも思ふが岡書部にはなかつたと思ひます。それも亦軍機處關係のものは一つもないと云ふ樣なことを聞きました。上海で渡邊君にでも會つたらもうすこしよく聞いて置きませう。猶岡書部には實錄の一部が殘つて居ります。これも事變で若干かけた由。今のところ朝天宮にある約三千箱とかのものが問題ですが、元來は二萬とかだつたさうですから碌なものはないのではありますまいか。（下略）。……附記これによると山と積み出された北京の文物もどうやら今は南京にはないらしい。丁度この便りを貰つた一兩日前、故宮の方甦生君から「南遷した故宮の文物は大方日本に渡つたといふ話を聞いたが、眞僞の程を知らないか」と聞かれ「そんなことは萬々あるまい」と言つておいたところで彼此思ひ合せて些さかわびしい。今こそ北京にかへしてほんたうの利用價値を發揮し得る樣な組織も可能な時だと思ふのだが。（一四、一一、一六　今西記）